

論文題目：「意味のイノベーション」の発展的批判と実践可能性拡大のための理論的再解釈

氏名：井登 友一

論文要旨：

本論文は、第一章において従来の技術主導型イノベーションおよび市場牽引型イノベーションによる新たな価値創造に関する閉塞感を打開する第三の道としてロベルト・ベルガンティによって提唱された「意味のイノベーション（以下：IoM）」について、イノベーション研究において従来革新対象として扱われてこなかった「意味」に着目する概念的な新奇性と独創性を評価したうえで、ベルガンティが掲げる IoM の二大原則である「内から外へのイノベーション」および「批判精神」について実践者が適切に理解し、実践するための手がかりとなる理論的説明をベルガンティ自身が十分に為していない点を批判し、両原則が抱える矛盾と問題を他の理論的枠組みを用いて考察し説明できる状態にすることで、IoM をイノベーション実践理論として理論的に補完し完成しうる可能性を提示した。

第2章では、IoM の第一原則が抱える矛盾について、ベルガンティの一連の IoM 研究において研究当初は最も重要な概念とされていた「デザイン・ディスコース」に注目し、その意味を先行研究のレビューを通して読み解くことで、ベルガンティが言う IoM の主体となる「自分自身（ひとり）」とは、周囲の関係性から分断され孤立した「主体としての個人」ではなく、デザイン・ディスコースという多様なアクターから構成される複雑な関係性ネットワークを構成する一員として存在する個人が、関係性の中で一時的な局面において主体としての役割を「与えられる」存在であること。そして、IoM において重要となるのは個人の超越的な資質やビジョン以上に高質なデザイン・ディスコースの形成にあるという考え方をあぶり出すことで、ベルガンティがいう「ひとり」とは決して孤立し閉じた存在ではなく、主体は関係性ネットワークの中で形成されるものであると解釈することで理論的な説明が補完されることを示した。

第3章では、この理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確認すると共に、従来属人的と考えられがちなイノベーション（新規事業創出）における主体性は個人に閉じたものではなく、関係性ネットワークにおける集団的な言表行為によって生成され主体化されるものであるという構造をドゥルーズ&ガタリのアジャンスマン概念を用いることで導出した。

続く第4章では、IoM の第二原則である「批判精神」の真意について、ベルガンティが抽象的かつ一般的な説明に留めてしまっていることが実践者にとって適切な概念理解を困難にさせ、実践の障壁となっている点を指摘し、ジャック・ランシエールの批判概念を用いることで改めて理論的に説明することを試みた。結論として、ランシエールの批判概念を視座として IoM の批判精神を読み解くことで、ベルガンティが本来提唱しようとした批判概念の真意とは、あらゆる二元論を中断（宙吊り）し、安易な二項対立的枠組みから距離をとることで既存の意味体制を脱構築する行為であり、より良い新たな意味体制を再配置するための営みであることが説明できた。

第5章においてはこの理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確かめたうえで、最終章となる第6章において本論文全体の論考の整理と結論の提示を行った。

以上